掲載日:2012年04月28日, 面名:解説, 記事ID:KIJ20120428_M003000100AQ02002
(C)新潟日報社

時々草々

# 交流に感じる公益性

越智　敏夫（新潟国際情報大教授）

先々月、夫婦で十日町市に行った。主目的は同市鉢集落にある「絵本と木の実の美術館」である。

前回の「大地の芸術祭」で絵本作家の田島征三さんが集落の人々と協力しながら作ったもので、廃校となった旧真田小学校をまるごと「立体絵本」としている。メディアでも紹介され多くの観客を集めた。また田島さんはこの集落を舞台とした絵本「学校はカラッポにならない」も出版している。

当日は田島さん企画の美術イベントがあったのだが、夜は集落の雪祭りだった。美術館スタッフや観客も交流会に参加し、冬の花火など夜遅くまで楽しんだ。頻繁に集落を訪れる田島さんだが、この夜も皆と酒を飲み、その様子を自分のブログでも書いている。

集落の人々はわれわれ夫婦のような部外者の参加にも嫌な顔をするどころか、宴席で隣になったご夫妻は自宅に泊まっていけとまで言う。近くの南鐙坂集落の民宿を予約していたのでお断りしたが、こちらが恐縮するほどの歓待だった。また民宿では、買い物難民を出さぬよう食料品店を経営されている別のご夫妻とやはり酒を飲みながら遅くまで楽しく話をした。

鉢も南鐙坂も十日町市街から遠く、雪の量も半端ではない。しかし集落には芸術作品があり、それを見に人が入ってくる。作家も定期的に訪れる。日本中の子どもが読む絵本の舞台にもなり、多くの美術愛好家がブログ等で頻繁に紹介する。

こうして集落が外部と交流する。また交流のために内部の人々が協力する。すばらしいことである。おそらく芸術祭に参加している他の集落でもこうした光景は同様だろう。

もちろんこの芸術祭にも問題はある。しかしこれらの光景に接すると、税金の使い方として参考になる部分はあると思う。

公共政策の有効性を評価する統計的手法は進化しつづけている。しかしこうした光景の価値は数値化されるだろうか。高速道路の建設と文化政策は同レベルで論じられないと開き直るのではなく、こうした光景の公益性についても評価する言語を組み上げていくべきである。

おち・としお　1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に教授。専門は現代政治理論。